

寺
ごよみ

一月

一日 除夜の鐘

年頭参り

二三日 法要準備

御正忌

一五日後一時半 法要
一六日午後一時半 法要

ほんこさまについて

コロナ感染予防のため、お茶お菓子のご接待は遠慮させていただきま
す。年会費は一万一千円
です。どうぞよろしくお
願い致します。



寺報
善巧
ぜんぎょう

発行

〒938-0862 富山県
黒部市宇奈月町浦山497
白雪山 善巧寺
TEL (0765)65-0055
FAX (0765)65-0975
http://www.zengyou.net

親鸞聖人の祥月命日
御正忌

一月十五日・十六日



(本願寺山口別院のメッセージポスター)

昨年は怒涛の一年でした。令和三年豪雪と名付けられるほどの大雪から新しい年が始まったことが遠い昔のように感じます。二年目のコロナ禍、お講の食事当番は休止したままとなりましたが、お参りだけは止めてはならぬと月二回の全回執り行うことができました。永代祠堂会や報恩講の年中行事も縮小しながら行い、花まつりマルシェや民藝の展覧会もなんとか開催することができました。いずれも、一回一回の緊張感がとても高く、慣例で行っていた時の何十倍もの労力を感じています。その分、行事の意義を改めて問い直す機縁になりました。

つながり

コロナ以前は、考えることなく慣例で行っていたことを、「これってホントに必要なのか？」という問いがあらゆる場面で生じたのではないのでしょうか。

人と人の繋がりというのは不思議なもので、会話の中身とは別に、一緒に時を過ごした時間が少しずつ関係性を深めていく場合があります。言葉によるコミュニケーションはひとつの要素にしか過ぎず、じつはそれ以外の要素が大きなウェイトを占めていることを改めて実感しています。

仏教では、「言葉は月をさす指」と言います。指を見て欲しいわけではなく、指がさす方向を見て欲しいということだと思います。言葉の先には何があるのか。本質が問われています。

雪山俊隆

報恩講

十月十九〜二十日

報恩講は、二日間の午前午後四座、地域分散型でつとめました。昨年に引き続き、境内の親鸞聖人像にお供えのコーナーを設けてたくさんのお花を飾ってもらいました。法話は、富山市の奥野寛暢先生と、新潟の雲林重正先生にお話いただきました。



空華忌 行信講座

十一月四〜五日

善巧寺十一世僧侶の法要「空華忌」と、行信講座「正信偈に学ぶ」が行われました。四日、空華忌の法話は善巧寺が担当し、翌日の行信講座は天岸浄圓先生よりお話いただきました。



聞法の秋

十月と十一月は月二回の定例法座に加えて、報恩講と空華忌、そして行信講座が行われました。二カ月の間に七名のご講師を迎え、内勤めの空華忌を合わせると九回の法座でした。



10/16 平野明英先生



10/1 飛鳥寛静先生



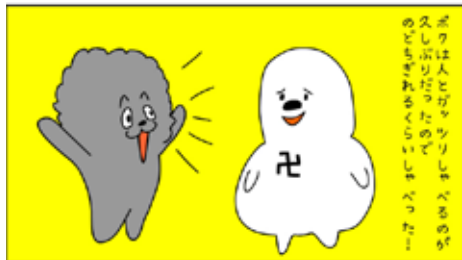
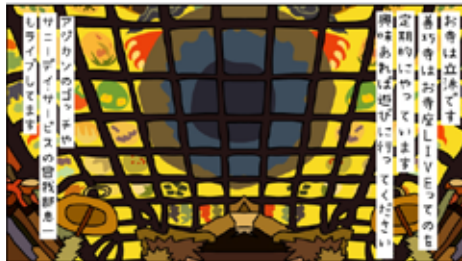
12/1 瓜生崇先生



11/16 青木哲隆先生



11/1 公文名智先生



12/16 西塔公崇先生



※アニメクリエイターの宮坂和秀さんが善巧寺に訪れた様子をマンガにしてくれました。続きは善巧寺のホームページへ。

清掃奉仕ありがとうございます

ほんこさまの準備

- ・朱色のろうそく
 - ・お仏飯
 - ・お花
 - ・お布施、年会費（11,000 円）
- ※感染予防のため、お茶お菓子のご接待は遠慮させていただきます。



御正忌

親鸞聖人の祥月命日にとまる法要です。

一月一五日（土）

午後一時半 法要

一六日（日）

午後一時半 法要



ほつこり法座

午前十二時

二月一日（火）
二月一六日（水）
三月一日（火）
三月一六日（水）

※お講当番は休止です。

冬季の上法事

お寺での法事「上法事」は、冬季期間中、暖房の効いた奥座敷（二〇名以内）で行います。本堂をご希望の方はお申込み時にお伝え下さい。



寺
ごよみ

二月

一日

ほつこり法座

七日

生地・荻生・植木

九日

生地・荻生・植木

一〇日

生地・荻生・植木

一五日

舟見報恩講

一六日

ほつこり法座

一七日

入善報恩講

一八日

入善報恩講

二一日

熊野・栃屋報恩講

二二日

熊野・栃屋報恩講

寺
ごよみ

三月

一日

ほつこり法座

二日

三都市報恩講

四日

三都市報恩講

七日

三都市報恩講

八日

三都市報恩講

一一日

下立報恩講

一四日

下立報恩講

一六日

ほつこり法座

一七日

下立報恩講

二二日

浦山報恩講

二三日

浦山報恩講

二四日

浦山報恩講

二五日

浦山報恩講

二八日

浦山報恩講

二九日

浦山報恩講

三〇日

浦山報恩講

三一日

浦山報恩講

合 掌

寺報が一八〇号を迎えました。先代隆弘が昭和五十二年に創刊し、平成二年から玲子が編集長をつとめ、平成十四年から現任職が担当しています。現在は四ページが定着していますが、平成二十三年までは八ページでした。一度下げたものを元に戻すのはとても難しいですね。

◇ ◇ ◇
 昨年の雪害で本堂屋根の軒先と、お蔵の屋根周辺が破損していました。時間がかかりましたが、なんとか昨年内に工事を終えました。今年の雪はどうか。今年のことでしょうか。

